医師の憂鬱

黒崎しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
医師の憂鬱

【Ｎコード】
Ｎ２９４１Ｚ

【作者名】
黒崎しのぶ

【あらすじ】
ごく普通の少年、赤峰ゆうりは、ごく普通の生活を送っていた。ある日帰路を急いでいると、ある不審者に出会い、勘違いされ誘拐される。
そんでもって誘拐された先が異世界で、人間も動物も見境なく人語をしゃべり、二足歩行していた。突然のことに対応しきれずにいると、歌って戦える名獣医アカツキに拾われる。助けた御恩とか言われて勝手に助手にされ、変な薬とかのまされることに。トラブルに巻き込まれっぱなしの少年が、人や動物の出会いで成長していく話。

患者　ゆうりの場合

一１１月の夕方、午後６時。
もう日は沈み切り、暗闇が支配していた。普段は賑わう都心の大通りでも、車が少し通るだけで、人っ子一人いない。そんな中を、ある少年が歩いていた。日本人にしては珍しい、赤みのかかった黒髪で低い位置で一つにくくっている。ルンルンと鼻歌を歌い、何やらご機嫌の様子だ。紺色のリュックを背負い、帰路を急ぐ。

一一一一一一今日は、俺の誕生日なんだ。きっとごちそうが待ってる！

速足から、小走りに変わり、自然と全力疾走になる。この少年は、年のころにして１２，３ぐらい。幼く見えるあどけない顔が、さらに小さく見せている。彼独特の髪が、テンポ良く揺れる。

十分ほど走ったところで、家の近くに人影が見えた。黒ずくめで頭の上あたりが不自然に盛り上がっている。雰囲気からして、一般人ではないことが分かる。少年の本能が不審者だと頭の中で警戒のベルを鳴らす。黒ずくめは、かなりの長身で、１９０ｃｍほどありそうだ。

一一一一一一羨ましい。

じゃなくて！早く逃げないと、なんかヤバい気がする。

焦りのあまり、一人でボケ突っ込みをしてしまった。人生初だ。
とりあえず逃げようと思った少年は、クルリと背を向け、もと来た方向へ足を向ける。興奮と恐怖で心臓が破裂しそうなほど、鼓動が早い。下を向き、無我夢中で走る。

前をよくみてなかったからか、何かにぶつかった。
黒い安全靴が、ジーパンから覗いている。

「あ、す、すいませ……」

頭を下げて謝り、顔を上げた少年は思わず固まる。
なぜなら――――――

「ぁ…ぁ……」

先ほどの、黒ずくめの男だったのだから。

「な……で…？」

眼を見開き、小刻みに震え、後ずさる。

何で何で何でナンデナンデなんで。

反対方向に走ったのに、何でこの男はこの行動もすべて理解したように悠々と、そして、堂々と。初めからこの場に存在していたかのように。

そこにいるの……？

パニックになっている俺の顎を黒ずくめは引っ掴む。俺は短く悲鳴を上げる。しかし、恐怖のあまり声にならない。グイ、と顔を近づけると、黒ずくめは、ニヒルに妖しく笑う。

「お前を、連れて、行く」

片言なしゃべり方だが、酷く低い声だった。

「あ……ぅ……」

助けを求めようにも声が出ない。
身を引こうにも、顎を掴まれ身動きができない。

逃げ場は、ない。

「どうせ、もうじき、ここに、くることになる、だから」

「あ……ぐ？」

黒ずくめの鋭い拳が俺の鳩尾に深く沈む。

強い風が吹き、黒ずくめのかぶっていたフードが脱げる。

俺はそのとき見たんだ。

大きく弧を描く口。

月の光に照らされて発光する緑色の大きな目。

茶色の二つの耳。

その姿はまるで、『猫』だったんだ。

患者　ゆうりの場合

「ここどこ……」

薄暗い路地でゆうりの記憶は覚醒した。肌寒く、小さな雪が暗い雲から舞い降り、辺りを白く染めていた。それだけならまだいい。ここには異様な光景が広がっていた。

雪に隠されるようにしてひっそりと存在する。無数の死体。どれも残酷な殺されたことが、首や手足がない死体たちが物語っていた。まるで、かまいたちの様な速さで切り刻まれたかのように、大半が大きく目を見開いたままだった。ゆうりは口を手で押さえる。こんなもの見たことがあるわけなく、ゆうりは大きく後ずさる。

「な……にこれ……？ぐぁ！？」

いきなりの吐き気がゆうりを襲う。何度かこらえるが、堪らず吐き出す。とても自分のものとは思えないような、不気味でおかしい声がでる。

「ふぁ……がは…」

一頻り吐いたら気が楽になった。軽く口を手でぬぐう。

「あのさぁ、さっきから見ているの誰？ねっとりした視線が気持ち悪いんだけど」

挑発するように言い、体を両手で抱く。すると、一人の男が出てきた。あの長身で、黒ずくめの男だった。フードはかぶらず顔はさらけ出ている。その顔は正しく猫だった。あの消えそうな記憶の中で見た、凶悪な顔。今はより一層深い笑みでこちらを見ている。

「さすが、『アカツキ先生』の弟子なだけはありますね。威勢だけは一人前だと聞きましたよ」

「いや、あかつきって誰だよ。弟子ってなんだよ！人違いです！」

全身を舐めるように下から上までみられ、ゆうりは思わず鳥肌が立つ。この男は嫌いだ。会ったばかりだけど分かる。この男の中には計り知れないような気色悪い汚らしい獣が潜んでいる。優しい目つきの中にも、何かが渦巻いている。

「本人だと確認できたところで、私の名を教えましょう」

「別にいらん」

「私の名は、ファン・ロック。ロックファミリーというマフィアを牛耳っています」

「（無視しやがった……！）あっそ。早く俺帰りたいん…」

「アハハハハ！やはりあなたは面白い。アカツキ先生を待っている間も退屈しないで済みそうだ！」

「人の話は最後まで聞けぇぇぇぇぇぇ！！！」

くっそう、アカツキって誰なんだ？なんで俺がこんな奴と……

「そういえば、あなたの名前を聞いていませんでしたね。教えていただけますか？」

「は？お前なんかに教えるわけ……！？」

がはっ、と声を上げゆうりは地面にたたきつけられた。相手は、何もしていない。ただそこに立っているだけだ。なのに体が、動かない。

「なぁ！どういうことだ！！」

「私の魔法ですよ。ｇｉｖｅａｎｄｔａｋｅ。私の問いかけには必ず答えなければならない」

「魔法……？ふざけんなよ…！バカも休み休み言え！」

ロックはおかしそうに笑う。

「そうですか、あなたはまだ覚醒していないのですね。まぁ、死ぬことはないので安心してください」

ロックの手がゆうりの体に触れたとき、体は拒絶反応のように大きく跳ね、やがて記憶は途絶えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2941z/

医師の憂鬱

2011年12月11日09時46分発行